

創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで



[創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで_ダウンロード1](#)

著者:松本卓也

出版者:講談社

出版时间:2019-3-13

装帧:平装

isbn:9784065150115

「創造」と「狂気」には切っても切れない深い結びつきがある——ビジネスの世界でも知られるこの問題は、実に2500年にも及ぶ壮大な歴史をもっている。プラトン、アリストテレスに始まり、デカルト、カント、ヘーゲルを経て、ラカン、デリダ、ドゥルーズまで。未曾有の思想史を大胆に、そして明快に描いていく本書は、気鋭の著者がついに解き放つ「主著」の名にふさわしい1冊である。まさに待望の書がここに堂々完成!

アップル社の最高経営責任者だったスティーヴ・ジョブズが「師」と仰いだ起業家ノーラン・ブッシュネルは、企業に創造性をもたらすには「クレイジー」な人物を雇うべきである、と説いている。ビジネスの世界でも「創造」と「狂気」には切っても切れないつながりがあることを、一流の企業人は理解していると言えるだろう。

だが、この「創造と狂気」という問題は、実に2500年にも及ぶ長い歴史をもっている。本書は、その広大にして無尽蔵な鉱脈を発掘していく旅である。

その旅は、「神的狂気」について論じたプラトン(前427-347年)から始まる。次いで、メランコリーと創造の結びつきを取り上げたアリストテレス(前384-322年)から《メレンコリアI》を描いた画家アルブレヒト・デューラー(1471-1528年)、そこに見出される創造性を追求したマルシリオ・フィチーノ(1433-99年)を経て、われわれは近代の始まりを告げるルネ・デカルト(1596-1650年)の登場に立ち会う。

デカルトに見出される狂気と不可分のものとしての哲学を受けて、あとに続いたイマヌエル・カント(1724-1804年)は狂気を隔離し、G. W. F. ヘーゲル(1770-1831年)は狂気を乗り越えようとした。しかし、時代は進み、詩人フリードリヒ・ヘルダーリン(1770-1843年)が象徴するように、創造をもたらす狂気は「統合失調症」としての姿をあらわにする。そのヘルダーリンの詩に触発された哲学者マルティン・ハイデガー(1889-1976年)が提示した問題系は、ジャック・ラカン(1901-81年)やジャン・ラプランシュ(1924-2012年)を通して精神分析の中で引き受けられる。そして、ここから現れ出た問題は、アントナン・アルトー(1896-1948年)という特異な人物を生み出しつつ、ミシェル・フーコー(1926-84年)、ジャック・デリダ(1930-2004年)、そしてジル・ドゥルーズ(1925-95年)によって展開されていく——。

このような壮大な歴史を大胆に、そして明快に描いていく本書は、気鋭の著者がついに解き放つ「主著」の名にふさわしい。まさに待望の堂々たる1冊が、ここに完成した。

内容（「BOOK」データベースより）

スティーヴ・ジョブズが「師」と仰いだ起業家ノーラン・ブッシュネルは、創造をもたらすには「クレイジー」な人物を雇うべきだと説いた。「創造」と「狂気」には深い結びつきがあることを先端で活躍する人たちは、誰もがよく理解している。そして「創造と狂気」という問題は、実に二五〇〇年に及ぶ歴史をもつ。本書は、プラトン、アリストテレスに始まり、デカルト、カント、ヘーゲルを経てラカン、デリダ、ドゥルーズに至る壮大な歴史を大胆に、明快に描く未曾有の書である。気鋭の著者がついに解き放つ渾身の書き下ろし!

作者紹介:

著者について

松本 卓也

1983年、高知県生まれ。高知大学医学部卒業。自治医科大学大学院医学研究科博士

課程修了。博士(医学)。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門は、精神病理学。

主な著書に、『人はみな妄想する』(青土社)、『享楽社会論』(人文書院)、『くつながらの現代思想』(共編、明石書店)、『症例でわかる精神病理学』(誠信書房)など。

主な訳書に、ヤニス・スタヴラカキス『ラカニアン・レフト』(共訳、岩波書店)など。

著者略歴(「BOOK著者紹介情報」より)

松本/卓也

1983年、高知県生まれ。高知大学医学部卒業。自治医科大学大学院医学研究科博士課程修了。博士(医学)。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門は、精神病理学(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)

目録:

[創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで_ダウンロード1](#)

标签

精神分析

德勒兹

哲学

评论

从篇幅就看得出来这本书的主角显然是德勒兹，推荐所有从事艺术创作的朋友读一下，很好懂（松本的特殊才能）；关于那种否定神学的疯癫，我将其称为资本主义式的疯癫，这样一种疯癫本质上只是由一个特定的空洞所规定的，因而这种疯癫的时空实际上是在这个特定的空洞中的无限下坠，无限流产。真正健全的疯癫…那将意味着一种空洞的无限重构无限再分割，乃至通过连续的褶皱填补这一空洞。

阅读体验可以说很震撼了！三个小疑点：1 «un délire bien fondé», 相比译成「善い基礎のある狂気」，还是「充分に基礎づけられる狂気」更准确。而且这个说法并不源自德里达，而是涂尔干：«il faut ajouter que ce délire, s'il a les causes que nous lui avons attribuées, est bien fondé.» 2 后期海德格尔的“诗学”或许隐藏着一种否定神学的结构，（作者并没有仔细地论证），但是“敞开”（Offenheit）这个概念直接被说成否定神学式的术语，似乎就不是很严谨了。3 没有比表面更“深邃”之物：德勒兹的参照点，更多地指向瓦雷里-斯多葛主义，而不是尼采。（logique du sens）

这当然不是一部哲学史，作者关注的还是精神病学/病迹学的问题，主轴是“精神分裂中心主义”——看到一次形而上学的深渊后就陷入疯狂”的悲剧精神——的病迹学在西方思想史上的变迁。如果《人皆妄想》说的是神经症的黄昏，这本书讲的就是精神分裂症的黄昏。全书似乎都在为最后德勒兹的“过程”思想做铺垫：这时代的创造需要的是一种新的健康？

松本卓也的特点就是把一堆难啃的肉给你切的一块一块的，前面就是一般通过科普，重点在德勒兹那一章，另外既然说到了狂气又说到了福柯和德里达，为什么没有讨论这两者关于狂气的论争呢？

[創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで_ダウンロード1](#)

书评

[創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで_ダウンロード1](#)